

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀覯本（きこうほん）

本館

稀

覯

本

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されていることがある。については、ご専門のお立場から本館所蔵の稀覯本をご紹介いただく

の中から

西洋版服飾稀覯書(2) 1830~40年代の刊本(上) 文化女子大学教授 石山 彰

わが国の明治初期にあたる19世紀の第3四半期は、一般に西洋服飾史研究上の黄金時代といわれている。ヴァイス(Weiss, H), ジャクマン(Jacquemin, R), キシュラ(Quicherat, J. É. J.), プランシェ(Planché J. R.), ラシネ(Raciné, A. C. A.), ホッテンロート(Hottenroth, F.)らの大著が続々と刊行され、異常な活気がみなぎっていた。事実、この期は、歴史的にも時代の大変革期にあたっていて、社会・文化・科学技術の面でも飛躍的な発展を遂げた。流行史上、巨大な広がりを見せたクリノリン・スカートは、この時代を端的に象徴している。

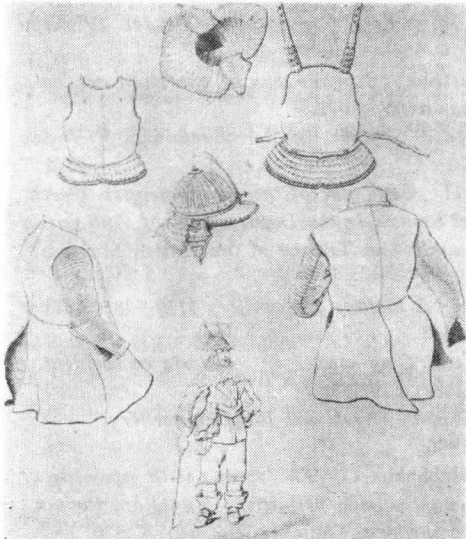
しかし、一方、この発展のげんうん(眩暈)に隠れて、1830~40年代の服飾史に関する研究や著作は、専門家の間でも、あまり知られていず、評価もなされていないくらいがある。原因の第一は、もはや、この期の文献がわが国では、ほとんど入手しがたく、直接、目に触れる機会がないことにあるといえよう。

歴史が一つの連続としてある以上、黄金期なるものが、こつ(忽)然と現われるはずがないことを予測はしていても、文献や史料をこの目で確かめないうちは、実感も当然ながらわいてこない。だが、これを機に本学図書館所蔵の資料に総当たりしてみると、意外とこの期の盲点を埋める文献が、かなり購入されていることがわかって、長年の図書館側の努力に感謝しているのである。この中から特に稀覯書の系列に属するものを群別に掲げた。稀覯書とはいって

も、類書がわが国に皆無のものばかりというわけではなく、中には近年復刻されたものなどもないわけではない。しかしながら、初版や旧版の価値は、年代を経るにつれて格別の意義をもつことは、洋の東西を問わず同一である。

さて、西洋服飾史集大成の黄金期に先立つ前段階としての1830~40年代には、こうしてみると、その前兆と目される幾つの特徴が現われている。第1は、古代や中世に対する関心が異常な高まりをみせはするが、体系化の段階には至っていない。にもかかわらず、第2点は、ドキュメンタル(史実や証拠物件に忠実であろうとする)な態度がみなぎっているということであり、科学的実証主義の明らかなるほう(萌)芽も、われわれはそこに見ることができる。芸術史上では、いわば浪漫主義に属するこの時代が、科学や学問の世界では、逆に実証を追っていたことがわかる。そしてそれは一面、ナポレオン一世のエジプト遠征以来の考古学の影響であった点も思い起こされる。今ならさしづめ、写真や映画をフルに活用することになるのであろうが、当時は、それを銅版や石版で線刷りした後、あるものは手彩色を施した。こうした時間的な広がりには平行して、第3点は、空間的な意識の拡大が見られるのも特色であり、次回に記述するフェラリオやヴァーランの著作は、その好例である。

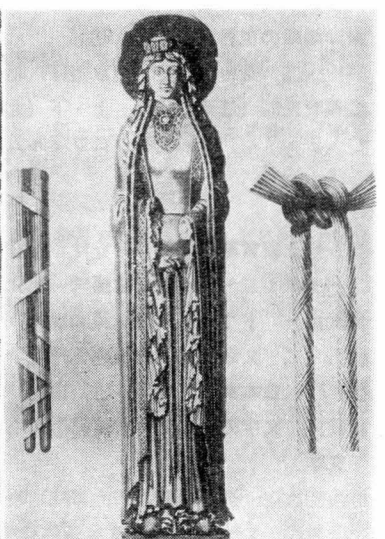
〔42831〕Meyrick, Sir Samuel Rush; Engraved Illustrations of Antient Arms and Armour, 2 vols., Oxford, 1830. メイリック『古代武具甲冑図録』2巻、フォ



胸甲騎兵の衣服と甲冑 17世紀中期 メリックによる



盛装の婦人 12世紀 ストラットによる



クロティルダ王妃 12世紀 ショーによる

リオ判。英国ヘアフォードシャーのグッドリッチ・コートにあるL・メイリックの蒐集集をJ・スケルトンの150枚の画に基づき銅版し、M・メリックが解説したもの。古代ギリシャ・ローマから17世紀までの武具甲冑が集録されている。同じ著者では、次の文献が、より高い評価を得ている。

〔390, 9M 1~3〕本学図書館の書架番号、以下同じ。

*Meyrick, S. R., A Critical Inquiry into Ancient Armour, 3 vols., Lond., 1842.* メイリック『古代甲冑の批判的研究』3巻、フォリオ版。初版は、1824年。歴史的に体系化された武装に関する最も有名な学術の古典書。エジプトに始まり17世紀末に及ぶが、中心は、英国におかれている。巻末に整ったグロッサリー（語い(彙)集)があり、前回紹介漏れとなった同じ著者の〔383, 133, M〕*Meyrick S. R. & Smith, C. H., The Costume of the Original Inhabitants of the British Islands, Lond., 1821.* メイリック、スミス共著『ブリテン島の先住民族の服飾』（フォリオ判、アクアティント製版手彩色）とともに、英国服装史研究の発展に多大の刺激を与えた。

〔383, 133 S 1~2〕*Strutt, Joseph; A Complete View of the Dress and Habits of the People of England, 2 vols., Lond., 1842.* ストラット『英国国民の衣裳と服装の全貌』2巻、26cm×33cm。初版は、1796~99に出版にされているが、42年の改訂増補版は、前記メリックの影響を受けて面目を一新した。本書は、いわば世界に先がけ発刊された、真の意味での体系化された西洋服装史研究の第2番目の文献であり、プランシェ(*J. R. Planché*)の*British Costume, A Complete History of the Dress of the Inhabitants of the British Islands, Lond., 1834.* 『ブリテン島住民の服装全史』と並んで、きわめて重要な意義をもつものである。プランシェの著作は、その後、何回にもわたって刊行されたため、普遍的であるが、ストラッ

トのそれは、近年になって再評価が高まり、先年翻刻された。特に本学所蔵本には、入念な手彩色が施されており、翻刻版とは比較にならぬ重みを示している。以前の初版本には、多大のミスがあったのを、著者自身が発奮して、みごとそれを克服し、大著を完成したことをプランシェは、本書の前書きで賞賛している。内容には、古代エジプトから17世紀までの服飾が扱われ、遺物や文献を駆使した、きわめて実証的な著作であり、英国における服飾史研究の伝統が、早くもこの期において端ちょ(緒)を開いたことを示している。

〔383, 13 S 1~2〕*Shaw, Henry; Dress and Decorations of the Middle Ages, 2 vols, Lond, 1843.* ショー『中世の衣裳と装飾』2巻、20cm×29cm。ほぼ同期の著作であり、7世紀から17世紀までのフランスとイギリスの服飾および諸工芸に現われた装飾を、華麗な手彩色（部分的に色刷石版を使用）図版と解説によって展開していて、本書自体が、一つの工芸作品となっている。資料は、中世紀の写本、墓石、ステンドグラス、タペストリーなどに求められ、評価が高いことは、ストラットと並んで後代の文献にしばしば引用されていることでもわかる。

〔383, 13 B 1~2〕*Bonnard, Camille; Costume des XIII<sup>e</sup>, XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, 2 tomes, Paris, 1829~39.* ボナールド『13・14・15世紀の服飾』2巻、23cm×30cm。イタリアとフランスで刊行された最も初期的なルネッサンス服飾図史であり、いずれも絵画彫刻などの遺物に基づいて写実的に銅版に線刻した後、しょうしゃ(瀟洒)な手彩色を施した、前回のランテと並ぶ名著の一つ。100枚の図版の作者は、イタリアの若い画家メルクーリ(*M. Paul Mercurj*)で、ボナールドが解説を加えて実証性を増してはいるが、まだ歴史的体系化が行なわれていない。イタリア版は27年に発刊され、後、60年にも再刊されたほか、後代の翻刻や引用も多い。(以下次回)

チョーサー一四〇二年ショーによる



イタリアの将校 十四世紀 ボナールドによる



若き婦人 十四世紀 イタリアのボナールドによる

